もくじ
小絵馬コレクションと絵馬趣味 … P1　資料紹介「明治四十一年三月起 日誌 東京煉瓦株式会社」… P3　お化け煙突60年⑨設備と操作員③ … P4

足立史談
第671号
2024年1月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
ＴＥＬ 03-3620-9393
ＦＡＸ 03-5697-6562

【写真１】難船絵馬

小絵馬コレクションと絵馬趣味

間所瑛史

新年を迎えました。初詣に行った人の中には絵馬に願いを書いて奉納した人も少なくないのではないでしょうか。そこで本稿では絵馬を収集していた佐野喜久男氏（一九一三～一九九三）の親族から昨年、博物館に一括して御寄贈いただいた絵馬を紹介します。

■今回寄贈された小絵馬は二五二点です。これらの絵馬は佐野氏によって裏面に貼付された解説の紙やメモによって、多くの入手先が分かるようになっています。絵馬のうち少なくとも一三八点は日本絵馬友の会の通信販売で購入されたものです。また、佐野氏が旅行先などで土産物として購入した絵馬や百貨店の絵馬展で購入した絵馬もあります。

佐野氏が絵馬を購入していた日本絵馬友の会は日本絵馬協会によって設立された会です。元々は協会の事業として絵馬の展覧会を開いていましたが、愛好家から絵馬を頒布してほしいという声が上がり、昭和五三年に発足しました（「あんな会こんな会」『実業の日本』八一―二〇号、一九七八年）。

次に今回寄贈された絵馬のうち、面白い図像のものをいくつか紹介します。

■**難船絵馬【写真1】**　福井県福井市小丹生町の春日神社に奉納された絵馬の図柄を手書きして作られた小絵馬で、実物は屋根型ではなく四角型で枠のある大絵馬です。「板子一枚下は地獄」ということわざがあるように、船乗りは命がけの仕事でした。そのため暴風雨による沈没の危機から助かるとそのお礼に神社に絵馬を奉納しました。図像の左上に春日大明神の御幣が現れており、船内に入った水を捨てている人以外全員が御幣に祈願をしている様子が描かれています。

■**鍵の絵馬【写真2】**　「心」という漢字に鍵がかけられています。この絵馬は広島県尾道市にある千光寺の絵馬です。鍵の絵馬は何かを禁じる意味を持っており盃（酒断ち）やサイコロ（賭博断ち）などのバリエーションがあります。「心」に鍵をかける絵馬は夫の浮気防止を願ったものです。この絵馬が派生したのでしょうか、現在の千光寺ではハート形の

【写真２】鍵の絵馬

錠が販売されています。寺のある山の展望台の柵にかけるもので、恋人の聖地になっています。裏面には昭和五〇年六月八日の日付のあるスタンプがあり、土産物として購入されたことがわかります。

■ヘチマ水の絵馬【写真３】 ヘチマの蔓を切って水をとろうとする女性が描かれています。秋にヘチマの蔓を切って茎を瓶に差し込むと、ヘチマが吸い上げた水が瓶の中にたまっていきます。こうして集められたヘチマ水は薬のほか、化粧水として利用されました。絵馬からはより美しくなりたいという奉納した女性の切実な願いが読み取れます。

■ザクロの絵馬【写真４】 鬼子母神を祀るお堂に奉納された絵馬です。鬼子母神はもともと人間の子供をさらって食べていた神でしたが釈迦に説諭されて仏法守護の神、子授け・安産の神となりました。鬼子母神は人肉を食べるかわりに味が似たザクロを食べるよう釈迦から勧められた説話があり、ザクロが象徴となっています。この絵馬も鬼子母神に安産祈願を願って描かれたものです。

【写真３】ヘチマ水の絵馬

【写真４】ザクロの絵馬

■趣味としての絵馬　民俗資料としての絵馬はこれまで祈願や信仰の対象を知る資料でした。絵馬に描かれた図像や祈願文、祈願主の情報などから絵馬が描かれた背景や地域、信仰圏などの文化の歴史が注目されてきました。また、絵馬師や絵馬市、奉納習俗など無形民俗文化財的な観点に光が当たっていました。個人が絵馬を収集することについては郷土の信仰や民俗といった文脈から離れた個人の趣味としてあまり関心を集めませんでした。

しかし、こうしたコレクションは博物館にとって有意義な資料となり、また何かを収集することは時代や社会情勢を背景とした文化的な営みです。

郷土玩具の収集は明治頃から起こり、各地で愛好家が生まれ、愛好家の間で雑誌も刊行されるようになりました。郷土玩具収集家として知られる川崎巨泉は『巨泉おもちゃ絵集』（大正七年）などで郷土玩具とともに絵馬を紹介しています。画家の武井武雄も郷土玩具愛好家にとって「類型的に見て玩具の成果に近いという点で、絵馬をも（郷土玩具に）数える習慣になっている」と述べており（『日本郷土玩具 東の部』地平社書房、昭和五年）、郷土玩具の一種として絵馬も収集の対象になっていたことがわかります。明治時代は全国的に鉄道が整備され、より速く長距離を旅行できるようになりました。愛好家の中には現地に行って郷土玩具を購入する人もおり、時代背景のもとで広がっていきました。

大正時代になると画家や郷土史家によって絵馬の図像をまとめた本が出版されるようになります。田中俊次『絵馬かがみ』（大正六～七年）、西沢笛畝『諸国絵馬集』（大正七年）、田中緑紅『小絵馬集』（昭和二年）などがあり、情報の共有や絵馬の記録がおこなわれました。

こうした絵馬を愛好し収集する「絵馬趣味」は戦後にもおこなわれます。日本交通公社が出版していた雑誌『旅』の読者投稿欄をみると、昭和四〇年代頃から絵馬の収集や交換に関する投稿が見られます。高度経済成長期の民芸ブームや国鉄が個人旅行を推進するために一九七〇年代に展開したディスカバー・ジャパン・キャンペーンによって地方の民俗的な文化への関心が高まっていき、そうした背景で絵馬収集も盛んになります。

絵馬の信仰を示した絵画の素朴なタッチは郷愁を誘います。また判じ絵のような謎解きや洒落に通じるものもあります。同じものを描いても地域や寺社によってデザインは異なりますし、同じ地域の絵馬でも絵馬師によってタッチが異なり、その違いを楽しむこともできます。高度経済成長の中で失われつつある地域の文化への懐古の思いが絵馬に託されたのかもしれません。

絵馬は信仰民具だけではなく、地域の文化を反映する対象として見出されてきました。現在、郷土の偉人やランドマーク、地元が舞台の漫画を描いたオリジナリティあふれる絵馬が生まれています。このような絵馬は、絵馬趣味により記念や収集といった新たな価値づけが強調されて生まれたとも言えます。

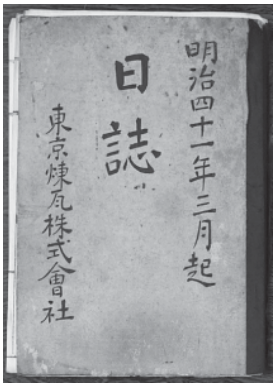
絵馬趣味の文化によって、図像も信仰から離れたものや新たな地域像を反映するようになったのです。

（郷土博物館専門員）

資料紹介「明治四十一年三月起　日誌　東京煉瓦株式会社」

鹿浜に所在した東京煉瓦株式会社（以下、東京煉瓦と省略）の社長を務めた鳥井家から寄贈を受けた鳥井家文書の中には、表紙に「明治四十一年三月起　日誌　東京煉瓦株式会社」と書かれた資料が残されており、現在解読を進めている（明治四十一年（一九〇七）　※以下、『日誌』と省略）。

この『日誌』は、東京煉瓦の日常、たとえば鳥井社長や事務員の動向、毎日の火入れの時刻、機械の掃除やメンテナンスなど、様々なことが記されており、煉瓦工場の実態を知ることができる貴重な資料である。そこで、資料紹介のために、『日誌』の中から一部を紹介したい。



『日誌』の表紙

■近隣工場との交流　『日誌』には、同じ江北村にある城北煉瓦株式会社や実煉瓦工場から視察に来たこと、反対にこれらの工場へ東京煉瓦から視察に行ったことなどが記されている。また、中村煉瓦製造工場の主人が死去した際には、堀取締役が葬儀に出席してもいる。

以上のことから、近隣の同業他社と交流していたことがわかる。

■全国からの視察　交流は近隣だけでなく、日本有数の煉瓦工場である日本煉瓦製造株式会社（埼玉県深谷市）や小菅煉瓦商会（葛飾区）などからも視察が来ている。

また、四月一日には、函館製瓦合資会社（北海道函館市）の支配人が視察に訪れ、「鳥井氏案内ノ為メ工場巡回セラル」と記されている。函館製瓦合資会社は、明治四十年に創立した会社で、様々なところへ視察に行ったとみられるが、東京煉瓦が全国的にも有名だったからこその視察だったのだろう。

■四月大雪の被害　四月八日から九日にかけて、東京は記録的な大雪に見舞われた。「朝日新聞」は、四月九日の朝刊に「雪月花の眺」と題した記事を載せ、「八日の月と咲き誇りたる桜とを一時に見るの奇観を呈したり」と記している。気象庁の資料によれば、東京の積雪は二〇センチだったという。『日誌』には次のように記されている。

四月九日　降雪
一夜来降雪、五寸余積雪の為、炭小屋一棟午前七時過墜落ス、
舁窯燃口ノ屋根一部分墜落、尚ホ諸所墜落ノ扼アルヲ以テ人夫使用シテ雪降シ為ス、
八時半、舁窯北側家屋根壱棟墜落ス、
九時十分、機械場家（屋）根、壱部墜落ス、

「五寸余積雪」とあるので、やはり二〇センチ程度積もったことが確認できる。この降雪により、東京煉瓦の炭小屋・登り窯・機械場などの屋根が崩落するという被害があった。しかも、人夫に雪下ろしをさせたとある。現在の東京で屋根の雪下ろしをすることはまず考えられないが、同年四月十日の読売新聞でも「未曾有の椿事」と評されている。

■大雨の被害　明治四十一年は、大雪だけでなく、大水害のあった年でもある。大水害は八月二十二日から始まるが、この間の記事は淡白である。大水害で『日誌』に割く時間が取れなかったのかもしれない。しかし、その二か月前にも大雨の被害があり、六月二十三日の記事には、次のようにある。

大風雨、昇窯に凹、溜水侵入セルヲ報告セルモノアリ、鳥井氏指揮シテ各溝の水排除セシム
右ニ付昇窯ニハ浸水排泄口を設クルノ必要ヲ感セリ

新しい機械を導入する工事をしていたところ、大雨のため登り窯に浸水し、鳥井氏の指揮のもと排水したのである。これに関連して、登り窯の排水設備の必要性を実感している。

相次ぐ天災によって工場設備は大きなダメージを受け、その都度工場はストップし、修復に時間を取られたのである。

■職員間のトラブル　東京煉瓦には多くの職工がいたためトラブルが起こることもあった。煉瓦生地切り出しの責任者（『日誌』には「親分」と書かれている）が就業時間に遅れてきた職員を殴打したのである。

事務所ヵ譴責セラルヽハ穏当ナルニモ係ラズ、直チニ殴打セラルヽハ残念ノ由訴出（中略）
召喚シテ其理由ヲ調査スルニ、是屢々不都合ノ事アルモ免シ置キシモ、再三ニ及ブニ依リ、事務所ヘ申上ゲズニ殴打セシハ申訳無之由詫入ルニ付、双方ヘ対シ、喧嘩口論セザル様、鳥井氏ヵ説諭ヲ加ヘ置キタリ

殴打された職員は、会社から注意されるのが穏当なのに、責任者がすぐに殴打したことは残念だと訴え出た。そこで、会社はその理由を責任者に聞いたところ、これまで再三許してきたが、あまりにひどいので直接殴打してしまい、申し訳ないとの謝罪があった。そこで鳥井社長から責任者と遅刻した職員に喧嘩口論しないようにと注意をすることで事態を収拾させた。社長の苦労がしのばれる。

以上、断片的な紹介となったが、今後も解読を進めていきたい。

（文化財係学芸員　佐藤　貴浩）

お化け煙突60年⑨

設備と操作員③

格和 宏典

■**補機**　若手が担当するのが補機でした。補機とは主機であるタービンの機能を発揮させるためのさまざまな補助機器のことで、いかに主機がえばろうが、手足となる補助者がいなければなんにもできません。「駕籠に乗る人かつぐ人 そして草鞋を作る人」という言葉があるように、草鞋を作り駕籠をかつぐ人が補機担当なのです。そんな下働きともいえる仕事をこなし、晴れて主機運転員の道に進むのですから、数ある補機がどのような性能・性質を持ち、主機のどの部分を手助けするのか体に覚えさせなければなりませんでした。

■**補機の役割**　本館２階にタービン、そのタービンの下に復水器があり、取り囲むように次のような補機が設置されていました。

○循環ポンプ＝復水器に冷却水を供給するポンプで、容量は復水器の冷却水量、軸受冷却水量、その他必要水量の合計。

○エアポンプ＝汽機を起動し７５０rpm（註）まで回転をあげたら、汽機内部の空気を抜き、翼車の抵抗をなくすとともに蒸気の通りを良くするためのポンプ。

○エアクーラー＝３号発電機の水冷却閉鎖自冷式クーラーのことで、発電機内の空気を回転子にファンの風圧で循環させ、冷却する方式。

○復水ポンプ＝復水をボイラー水として給水加熱器を通り、温水槽（ホットウェルタンク）まで送水する。高真空の復水器から温水を汲みだすための運転には注意を要した。

○エアウォッシャーポンプ＝１・２号発電機の冷却用ポンプで、外部空気をエアウォッシャーという水の噴射で洗浄してから、発電機内に入るよう風洞が付いており、発電機の回転子についているファンによって発電機内をまわって外に出す方式。

○ドレインポンプ＝給水加熱器で復水温度をあげるため蒸気（抽汽という）を使用するが、この抽汽が冷えて温水になりドレン（復水）となり、このドレンを主復水ラインに戻すポンプ。

○オイルクーラー＝タービンの潤滑油は、運転中主油ポンプから各軸受などに送油され循環している。この間に温度が上昇した油を冷却する設備で、規模は小さいが復水器と構造は同じ。細い管の中を冷却水が流れ、外側を潤滑油が通る。

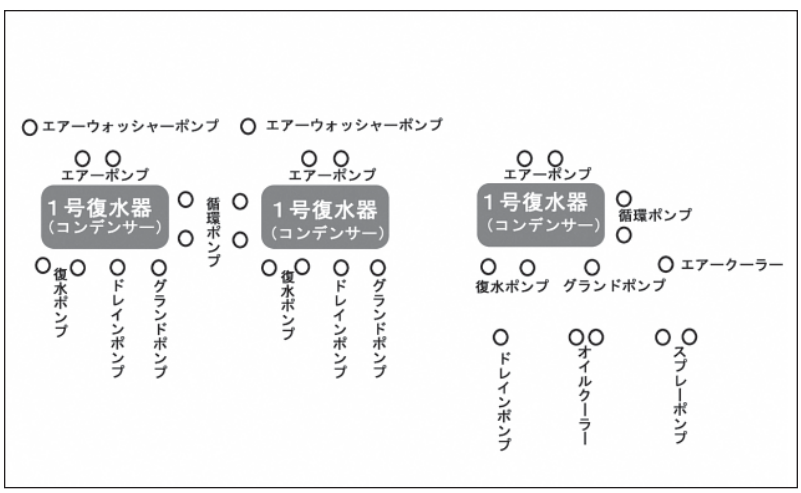
■**取水口と復水器**　２階のタービンの真下の１階に復水器がありました。本館建屋の項でも説明しましたが、使用した蒸気を冷却し、温水に戻してボイラー水として再使用するための装置ですが、復水器には約２０００本の冷却水管が取り付けられ、その中を隅田川の水を流していました。

隅田川岸壁に１・２号タービンと３号タービンの２本の取水口がありましたが、どちらもゴミ除けのスクリーンがあり、暗渠水路になっていました。新入社員研修でスクリーンに引っ掛かるゴミ撤去を体験しましたが、「よくもまぁ こんなに流れてくるもんだ」と思ったものでした。当時の隅田川はゴミ捨て場と化し、工場廃液垂れ流しの状態で異臭があり、「きったねぇ（汚い）なぁ」と思ったものでした。

先輩指導員は、「このゴミを処理しないと復水器への水量が減り、発電停止という事態にもなりかねない大事な仕事なんだよ。」とハッパ？をかけられ頑張った記憶があります。

スクリーンを潜り抜けた小さなゴミは網を張った回転除塵網に引っ掛かりますが、そのゴミをスプレーポンプの水圧で洗浄しました。

汽機係に配属になった同期生は、「３直の夜勤時に復水器の清掃を行うんだけど、復水器水管集合部分は冷却水による生温かさからくる異様な臭気になんともやりきれない気分に悩まされたもんだよ。このため作業服は汚れと臭気がこびりつき、作業が終わると毎回洗濯しなければならなかったんだ。補機担当は新人の役目とはいえイヤな仕事だったよ。隅田川がきれいだったらなぁ。」とぼやいていました。

つづく

（註）rpm（revolution per minute）回転する物体などが一分間に何回転するかを表す単位。